



# 上野彦馬とその時代

姫野順一

## ① 対外危機の中で

写真の開祖上野彦馬(1838~1904)年は、明治維新を挟んで幕末と明治の近代への転換期に、「一身にして二生を経た」(福沢諭吉「福翁自伝」)世代の人物である。この連載では、彦馬の生涯とその時代を写真を交えて再現してみたい。

彦馬が誕生した天保9(1838)年ごろ、日本は飢饉と対外危機の渦中にあつた。天保8年、日本人漂流民の送還と通商交渉のため浦賀に來航した米国商船を、幕府が砲撃、退去させた「モリソン号打ち払い事件」が発生。これを批判した高野長英の「戊戌夢物語」と、渡辺崋山の「慎機論」の出版をきっかけに、「蕃社の獄」と呼ばれる蘭学者の言論弾圧が起きた。

欧米のアジア進出に懸念を深めた長崎の砲術家高島秋帆は天保11年、幕府に砲術改革の意見書を提出。翌



上野彦馬(長崎大学附属図書館所蔵)

### 上野彦馬とは

うえの・ひこま 日本における写真の開拓者。長崎に赴任したオランダ海軍軍医ボンベに学び、蘭化学書「舎蓋局必携」を著し、写真に出会う。スイス人のロシエ、イギリス人のペアトら外国人写真師から撮影技術を習得し、文久2(1862)年、長崎で写真館を開業。武士や庶民、維新の志士たちを撮影した。内田九一や富重利平ら多くの門人を育てた。



俊之丞が建設した硝石工場が描かれた「製硝図繪」(打橋半雨画、学校法人産業能率大学所蔵)

## 異才の父の背を見て成長

12年に江戸に招かれ洋式銃の訓練を実施した。秋帆と競い、火薬原料の硝石製造に携わるなどした異才、上野俊之丞(1790~1851年)の6番目の子ども(四男)として彦馬は生まれ、父の背を見ながら育つことになる。

上野家は代々画家の家系。俊之丞は長崎奉行に太刀や短刀を献上するほど鍛鉄にも優れ、文政3(1820)年ごろには七宝流球の細工を奉行に献上している。用器画法の画家でもあり、優れた色彩感覚は学

んで化学薬品や染色の知識によつていた。俊之丞は32歳の文政5(1822)年、御用時計師幸野家の養子となり、時計師の傍ら市井の科学者として生きた。出島のオランダ商館医シーボルトが娘イネに贈る時計に彫金を施した記録がある(俊之丞手控)。

さらに通詞の中山作三郎からオランダ語を習得。出島に入りし、シーボルトの薬剤師ブリュゲルや、後継者のピエロット、テキストル、医師モーニッケから物理化学を学んだとされている。その語学力は、砲術・火薬書の「砲学便覧」「夜雨割記」、三角関数を含む測量術書「砲家秘函」の翻訳書に表れている。

文政後期(1820年代後半)には薬種研究を始め

ていて、対外危機の中で天保10(1839)年ごろ硝石製造を始め、輸入薬品の染色による木綿布の更紗製造にも取り組んだ。

佐賀藩武雄領の「長崎方控」(天保一嘉永)には、「館入」を許された御用商人上野の取引として▽薬製書▽数学書▽顕微鏡▽各種時計▽フレガット船の模型▽エレキテル▽鋳鉄書▽測量器具▽赤じゅうたん一の記録が残る。佐賀藩は大砲製造や台場建設を相談し、薩摩藩にも蘭書輸入や火砲類を周旋した。

俊之丞は天保10年ごろ、御用精錬方(理化学研究所)を命ぜられ、中島で洋式の「ザルペーテル・プタニターゼ」(硝石工場)を建設した。上野家にはその「製硝図繪」(打橋半雨画)が残されている。ここは彦馬の遊び場でもあった。

彦馬8歳の弘化3(1846)年から3年かけて俊之丞は世界地図「輿地平分図」を描いた。地図には「蘭龍」(ロンプス)、「格古氏」(平戸の航海士コックス)、「勃那把乎爾」(ナポレオン・ボナパルト)の小伝が付記されている。母屋の庭には五大陸の箱庭が造られていた。彦馬幼少の頃、周りには更紗の型紙、木版・銅版、鋳金や鍛金の器具、写真機械、製薬材料、時計の精密用具、火砲の模型、見取図、西洋の家具、調度品、装飾品、絵具や蘭書、蘭語辞書など、異国のにおいが漂っていた。父の存在と、科学技術と世界の広さを知る環境が少年を大きく成長させた。俊之丞の戒名「知新斎潜翁若龍居士」には、彦馬に受け継がれる探求心と開拓精神があふれている。 Ⅱ 偶数月の第3日曜付サデーぶんかに掲載 Ⅱ



ひめの・じゅんいち 1977年九州大学院経済学研究科博士課程修了。博士(経済学)。専門は経済学史、知性史、古写真を中心とする長崎学。長崎大教養部教授、環境科学部教授、付属図書館長などを経て、2016年に長崎外国語大特任教授。18年同大副学長、21年4月から学長。主な著書に「J. A. ホブソン人間福祉の経済学」「龍馬が見た長崎」(写真に見る幕末明治の長崎)など。



上野俊之丞絵像(学校法人産業能率大学所蔵)